

なにわ たいむず

No.119

contents

- 01 企画／管理倉うるしまのヨモギマバナシ
- 02 お母さんの日々あれこれ
- 03 ソラエデザイン・アート・ミュージアム
- 04 Case Book
- 06 オンラインこいほのなんでも日記
サポータークラブ
- 07 スタッフ紹介

4月、辞令交付式を行いました

4月1日、新しくなわの里の仲間となるスタッフの辞令授与式を行いました。今年度は、ライフサポートななわ(成人支援)に2名、きつずサポートななわ(児童支援)に1名、あわせて3名のスタッフが入職し、共に歩んでいくことになりました。

私事ではありますが、3月・4月に娘の卒業式や入学式に参加する機会がありました。不安、期待、いろいろな思いがないまぜになって、胸がくすぐたくなるような気持ち、そんなものが娘の中にあるのだろうか、あ、ということをしたの間に考えていました。

学生と社会人という違いはあっても、新任スタッフの方々もそれは同じだろうな、この文を書きながら改めて感じました。3名のスタッフがななわの里を選んでくれたことに感謝し、一人ひとりの思いを大切にしながら、共に歩んでいけたらと思います。(小池)



NEWS

実践事例発表の「報告」

2026年2〜3月にかけて、YouTubeで配信をしておりました『ななわの里実践事例発表』ですが、137名の方々からお申し込みを頂き、5つの動画をあわせて979回のご視聴を頂きました。

ご視聴頂いた方々から、たくさんのご感想をお寄せ頂きました。頂いたご感想を発表者に送ったところ、「感想拝見しました。凄く励みになります」というコメントが返ってきました。『実践↓発信↓ご感想から励ましを頂く↓日々の実践：』『そんな循環が実践事例発表の醍醐味だと思いますし、この仕事の醍醐味でもあるのかと感じます。この場をお借りしまして、ご視聴くださったみなさまに改めて御礼申し上げます。

今年度は2027年3月12日(金)に柏原市立国分図書館にて、久しぶりの対面形式で実践事例発表を開催する予定です。まだ少し先ですが、楽しみにして頂けたらと思います。(小池)

管理者の「まの」

法人の功労者たちの退職

新年度になり、すでに数か月が過ぎました。ひと昔前の自分だと、4月は新しく始まることに刺激を受け、がむしやりに走り抜けていましたが、50歳を迎える今は無理をする気力も体力もなく、焦りを横に置きながら何とかしのぐ毎日です。

この3月末で、法人設立から従事していたスタッフが退職しました。定年退職後も再雇用として勤め、勤続35年でした。利用者さんやスタッフの父的な存在として、現場に安心感を与えてくれる存在でした。長年、大変お疲れさまでした。

また、前理事長のころより法人経営に携わっていた方が、同じくこの3月末で退職となりました(法人の理事としては今も残っていたいております)。組織経営のプロとして、法人の経営とは何ぞやということに常に問いかけていただきました。また、お酒を嗜む方で、よく食事に連れて行っていただき、様々なお話をお聞かせいただきました。「ななわの里は話し合いが足りん!結局は人と人。もつとやり取りせい!」とおっしゃっている姿が今でも頭に浮かびます。法人運営に多大な貢献をいただいた恩人の一人です。この場をお借りし、あらためて感謝申し上げます。

法人もさることながら、自分の家庭でもこの4月から新しい生活が始まりました。長男が4月から大学生となり、次女が中学に入学しました。次女はこれまで二つ下の次男と同居でしたが、中学生になったので、きょうだい全員一人部屋を作ろうということになり、自宅内の大移動が行われました。てんやわんやでしたが、結果断捨離が進み、生活空間がすっきりしました。物が減るだけで心が軽やかになるなあと、整理整頓の効果を実感しています。

突然ですが、「アブダクション推論」を皆さんご存じでしょうか?結果から原因を推測する(仮説を立てる)方法で、仮説↓検証を繰り返し、「仮説が間違っていることを証明すること、本質に近づく」考え方のようです。利用者さんへの支援の向き合い方にすごく似ているなあと感じ、この考え方を知ったときはワクワクしてしまいました。しばらくアブダクション推論について勉強したいと思っています。何か気付くことがあれば、この場でご報告しますね。

コモヤマバナシ



夏の思い出

夏は本人がすごく楽しみにしている季節です。毎年の恒例行事として、和歌山県に行き、親戚一同が集まります(大人が15人くらい、子供も15人くらいの計30人程の大人数です！)。

車で高速道路に乗った時から、本人はどこに向かってるか感づいて大興奮します！海南では、海を満喫します。海の中を潜水して泳いだり、SUP(ボードの上に立ってパドルを漕いで進むアクティビティ)をしたり、一度遊び始めると、「休憩するよ」と言ってもなかなかあがってこないくらい遊びます。魚釣りも父親とよくして、釣った魚をフライにして食べるのが、すごく好きです。海南の海じゃなくて、田辺の川でキャンプをする時もあります。川では、父とサッカーをしたり、カエルをずっと探すことが多いです。毎年、真っ黒に日焼けする程、夏を謳歌する息子です。

By みちこ



お母さんが日々感じていることを
ちょっとだけ垣間見るコーナーです

担当者コメント欄

どちらのお話も、夏にしかできない活動を満喫している様子がよく分かりますね！今年も暑い夏になる予報ですが、夏バテに気を付けつつ、楽しい夏の思い出を作りたいと思います！

(高木・梶原)

今回のテーマ

「夏の思い出」

夏の思い出

18才の時に施設にお世話になり、もうすぐ15年になります。小さい頃は、水遊びが大好きで、水道代にヒヤヒヤしていたことも、今では懐かしい思い出です(笑)。

音楽も大好きで、盆踊りの音楽がお気に入りです。近所の盆踊りで、最初から最後まで、体を揺らして、なかなか帰らなかったことも、今となってはいい思い出です。

今でも、自宅から施設に送るときは必ず車の中で音楽を聴いて、体を揺らしています。

by母





理事長マエダが、ブラブラするコーナーです

いつも通り、超コンパクト版ですが、最新テクノロジーを駆使されつつも、農業や旅行の付き添い等、利用者さんとゆつくりと関わる時間を大切にされている大仲さん。また色々、教えてください。

マエダ「でも、支援計画だけは、(参考にはしても)自分でつくりたい。とか、思っていますが」
大仲さん「そこはなにわさんが、大切にされるところで線引きするでよい、と思います。実際、プロセスを一切、経験していない新任支援者がAの答えを丸写しすることが、育成上どう影響していくかも踏まえて、何を取り、何を捨てるか、各施設が戦略的に取り組むことが大切だと思います。繰り返ししますが、こちらが何も知らず、放っておくことが一番のリスクになると思います」

マエダ「Aを少し懐疑的にもみている、私のようなおっちゃんに一言、お願いします」
大仲さん「放っておいてもこれからの世代は、勝手にAを使うことが当たり前になりますから、まずは、皆が使っているものを積極的に知り、活用し、『組織として管理』していくことが必要だと思います。あとは目的の明確です。自分は削減できる時間やコストを少しでも直接支援に充てることを重視したいと考えています」

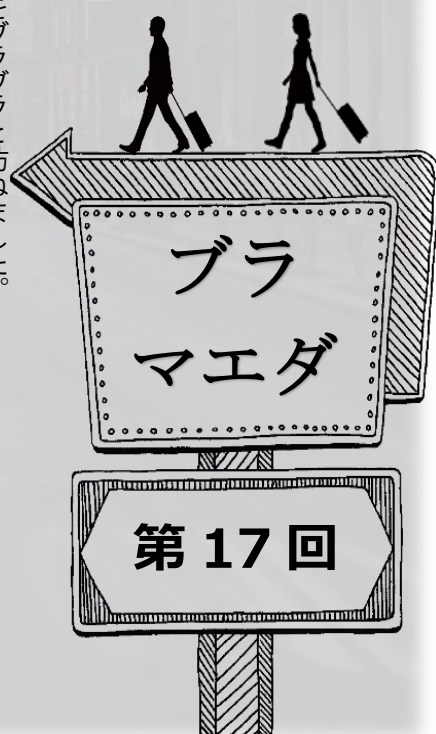
マエダ「今日は、私が知る限り、大阪の障害者施設の中で一番、Aを活用されている大仲さんです」
大仲さん「なにわたいむずデビューうれしいです。一番活用しているかどうかは分かりませんが、Aの進化はすさまじいですよ。実は、施設のケース記録アプリも、自分が、数日で作成し実際に運用しています。これまで高額の費用をかけて業者に依頼していたものや、何日もかけて作成していた資料も、簡単につくれてしまいます」

今回は「堺あすなろ会」の大仲 譲さんをブラブラと訪ねました。



社会福祉法人堺あすなろ会

理事 大仲 譲さん



アトリエナニワ

なにわの里で使用している自立課題や支援ツールを紹介するコーナー

【ツールの説明】

- ・ 休日の余暇を何にするかを決めるためのツール
- ・ 午前と午後に分けてしたいことを決める

【ツールのメリット】

ツールがあることで、言葉を話せない利用者さんでも、したいことをスタッフに伝えることができる。

『 今日の余暇は何にしよう? 』

今日は
何にしよう
かな?

さん 余暇 予定表

あさ			ひる		
かいもの	さんぽ	ティータイム	かいもの	さんぽ	どらいぶ
その他			その他	ティータイム	その他

※その他の場合、下記空欄にスタッフ記入。



できないのではなく、待てていなかった
— Aさんの移動の支援から学んだこと
通所支援 2 係 藤井やよい



【はじめに】

Aさんは、「食事に行く」や「トイレに行く」といった「場所の移動」が難しい方です。声かけや実物を見せて活動を促しても反応が乏しく、移動には支援者が手を引く、背中を押すなどの「身体介入」が必要です。事業所としても、Aさんの身辺自立を考えた際、整理が必要であるという認識を持っていました。そのような経緯から、「Aさんに対しての適切な移動の促し方」をチーム全体で見直す取り組みを行いました。今回は、その際に実施した支援を紹介します。

【Aさんの紹介】

Aさんは、重度知的障害のある30歳の女性です。普段は自宅から事業所に通っています。日中は、簡単な手作業を行ったり、歩行活動に参加したりしています。

【PLAN 計画】適切な移動の促し方

「Aさんに対しての適切な移動の促し方は何か？」を考える前に、まず支援者が知っておきたい情報として、Aさんはどのような指示が理解できるのかという「指示理解スキル」の確認が挙げられます。

この点に関しては、Aさんの普段の様子を観察することで、絵の理解があることを確認していました。このスキルを活かし、「活動を促す際は、その場所を描いた絵カードを使って行先を伝える」といった対応を計画しました。

【DO 実行】

Aさんに活動を促す際は、絵カードを渡す対応をチーム全体で統一し、行動を観察しました。

【SEE 検証】

しかし、Aさんが絵カードで示した場所へ移動することではなく、支援者が手を引く、背中を押すなどの身体介入が必要でした。支援前後では有意な差は確認できませんでした。

【再 PLAN】なぜ上手くいかないのか、再度観察して考え直す

では、どのような点をどのように見直せばよいのか？具体的なアイデアが湧かない中、「Aさんが移動の促しを受けたときの様子」を観察し直しました。観察を続ける中で、対応する支援者のある共通点を発見することができました。それは、「絵カードを提示してから身体介入を行うまでの時間」です。

支援当初は、「Aさんが行先を理解することで移動をスムーズに…」と考え始めた支援でしたが、いつしか「行先を理解できてないのかな」「他の業務時間が押しているので早めに」といった支援者の印象や考えが先行してしまい、結果としては以前と変わらず絵カードの提示と同時に身体介入も行なっていました。

これでは、A さんが絵カードを見て行先を理解していたかどうか、判断できません。そこで、

【再 DO 実行】

絵カードを提示した後、A さんが動き出すまで一定時間待ち、経過時間に合わせた対応方法を整理しました。



【再 SEE 検証】

A さんが自分から移動するまでにかかった時間

対応回数	10 分以内	10 分～20 分以内	20 分以上
24 回	12 回	11 回	1 回

結果、A さんは絵カードを見てから 20 分以内に自分で移動しており、半分以上は 10 分以内に移動していることがわかりました。時間はかかりますが、自分で移動できる頻度が増え、支援者からの身体介入を減らすことができました。

【まとめ】

このように「A さんに対しての適切な移動の促し方」の支援内容を振り返ってみると、「PLAN 計画」→「DO 実行」→「SEE 検証」→「再 PLAN 計画」→「再 DO 実行」…と繰り返し支援のサイクルを回し続けることは、課題を達成させるプロセスとして大切なことだと改めて思いました。加えて、支援者の行動を観察することに着目したことで、支援者の都合や考えで対応していたことに気づき、支援者として「相手の意思を確認できるまで待つ」といった礼儀を押さえられていなかったなと反省しました。この支援で得たことをチームで共有し、A さんへの支援はもちろんのこと、他の利用者さんへの支援・取り組みへも活かしていこうと思います。支援というと支援者が与えることと考えがちですが、利用者さんから学ばせて頂くことの方が沢山あるということに気づくことができた支援でした。

ジムインこいけのなんでも日記

「あり方」に寄り添う

4月に本部事務局で「なにわの里と歩む会」の総会がありました。昨年度の事業報告等を行うことが会の趣旨だったのですが、最後に利用者さんたちのご様子を写したスライドを流していました。僕自身は会には参加しておらず、遠巻きに覗いていたのですが、昨年の創立記念食など僕が撮影させて頂いた写真をそのスライドに使って頂いていました。ご家族の方々も、利用者さんたちの普段の様子を見ながら、和んでおられるように感じました。

写真を見て頂けてよかったな、なんて思っていると、帰りがけにご家族から「ありがたいお言葉を頂きました。久々にお会いする方もおられ、「お変わりないですか?」と話していると、「寄付のお礼状に直筆で一言添えてくれているのが、とてもうれしい」と仰っていただきました。なんというか、「行ったこと(do)」というよりも「自分の仕事のあり方(be)」をほめていただけたような思いになり、とてもありがたく感じました。

また、僕自身も他の方の「あり方」に寄り添うことができたのではないか、と思えたことがあります。職場の同僚の方とお食事に行ったときのことです。僕はその方のお仕事をしているときの振る舞いや雰囲気いつも元気を頂いていて(表現を変えれば、一人のファンと言いますか)、そのことにお礼をお伝えしました。すると、その方から「なんだか存在を肯定してもらったような気がします」という言葉を頂きました。

僕は、周りの方々から「存在を支えて頂いている」と感じることは多々ありますが、自分自身がそうになっているというよりはあまり感じられませんでした。その方に先の言葉を頂いて、「そうか、自分も他の方の『あり方(be)』を支えることができるのだな」と一つの自信になりました。自身のbeを支えてもらえることに感謝し、また、他者のbeに寄り添うというほどと安心できる相互作用の中で、人はいきいきとその人らしく振舞えるのではないかと思います。そんな関係性があることに、心から感謝の思いです。

なにわの里サポータークラブに資金又は物品・労力などでご支援をいただいた方々

2026年1月1日～5月31日

(敬称略・順不同)

(個人の部)

中島 由香

野中 マサ子

山下 孝子

井上 明子

小畑 チヅ子

小島 純子

車谷 二三夫

馬場 幸枝

鈴木 曠二郎

STAFF INTERVIEW

なにわの里スタッフの紹介コーナーです。インタビュー形式で、スタッフの声をお届けします！

— Kさんがなにわの里に入職した（2015年4月）きっかけを教えてください！

前職で、知的障害のある方と関わることもありましたが、農作業や受注作業をしている作業所に手伝いに行くことがあったのですが、いろいろお話しさせて頂く中で「こんなふうにおしゃべりしながら、人と関われる仕事もいいな」というふうに思いました。その後、転職する際に障害者支援のお仕事を探し、なにわの里と出会いました。なにわの里の利用者さんは、お話しできる方が少なかったのが、最初に抱いていたイメージとはちょっと違いましたが、見学の際に利用者さんそれぞれに行われている個別支援などを見せてもらって、おもしろいと感じました。

入職当初は、とにかく覚えることが多く、そのことが大変でした。利用者さんのお名前はもちろんですが、個別の支援がかなり細かくて、その内容を覚えるのが大変でした。



K・S
(通所支援2係)

— 11年を振り返って、一番うれしかったことはどんなことですか？

年度が替わるたびに、異動や担当利用者さんの変更があるわけですが、それをご家族にお伝えした際に「来年度もKさんに担当してほしい」というふうに言って頂けたことがとても嬉しかったです。入所支援の部署だったころに担当していたWさんのお母さんとは、特にやりとりが多かったです。時には言いづらい報告（お怪我をされた、など）もあったのですが、細かく連絡をする中で、お母さんとも信頼関係ができていったように思います。「Kさんには何でも話せる」と言って頂けたことが嬉しかったです。

— 11年働き続けることができた秘訣はなんだと思いますか？

入った頃は、10年続くとは正直思っていなかったです。秘訣はなんでしょう…支援をするのが楽しくなってきた、ということかなと思います。入所支援の部署だったころは、いわゆる「問題行動」への後追いの対応が多くて、なかなか「こういう支援がこちらにあっていいな」というふうな関わりができませんでした。通所支援の部署に異動になって、「このことができたなら、より楽しい暮らしになるだろうな」といった前向きな支援に時間がさけるようになったように思います。それが仕事の楽しさにつながっているように感じます。これからもその仕事の楽しさを大切にしながら、やっていけたらと思っています。

第119号

2026年6月20日発行

発行責任者 漆嶋真一

社会福祉法人 なにわの里

〒582-0025 柏原市国分西 1-3-43HOPE ハウス 202

E-mail naniwa@naniwanosato.jp

HP <http://naniwanosato.jp>

